

『ムーミンパパの「手帖」』

東 宏次 著

『彫刻家の娘』・『誠実な詐欺師』

トーベ・ヤンソン 著

藤津 麻里

昨年から、トーベ・ヤンソンの作品を継続的に読んでいます。ヤンソンはあの「ムーミン」の原作者。私は四、五歳の頃に、アニメのムーミンに熱中し、小学生時代にはムーミンの童話やコミックスも読みましたが、その後はほとんど読み返す機会がありませんでした。私にとってムーミン

は、幼い頃に読み漁った多くの童話のひとつ…楽しい物語のひとつでしかなかったのです。

ヤンソンの作品を読みなおすきっかけを作ってくれたのは、東宏次著『ムーミンパパの「手帖」』トーベ・ヤンソンとムーミンの世界』（鳥影社、一九九二）という本でした。この本は、ムーミン

をはじめとする彼女の作品を紹介しながら、そこに含まれたテーマを浮き彫りにしています。

「実際、ヤンソンの作品には、ほのぼのとしたあたたかさ、やさしさ、思いやり、おおらかさとともに、同時に残酷さや辛辣さ、意地悪さ、いじけなどもふんだんにあるのであって、テレビアニメのムーミンは、そうした毒のない分、原作のもつ深みを失っている」と著書の東氏は書いています。原作のムーミン物語は「大人の考える『子供向け』の作品に全然なっていない」というので

す。
では、ムーミン物語の魅力はどこにあるのでしょうか。「抽象性とユーモアとメタファーとに富んだ文体、適度に乾いてあたたかい人間観察、どこかに感じられる神様の気配、教育や親子・隣人関係などのうえでいたるところに発散されている自由の感触、そして何よりも、ふんだんに感

される自然の（とくに海の）存在」。これらのテーマを中心に捉えて、著者は独自の切口でムーミン物語をとらえていきます。

私が興味深く感じたのは、ムーミン一家はそれぞれ自分だけの「安らぎの空間」をもっており、その一方で、腹がたって一人になりたいときには「憎しみの空間」に行くのだという指摘でした。

「安らぎの空間」は、各人の個性にあった秘密の隠れ場所ですが、彼らはお互いの隠れ場所にずかずかとふみこんだりはしません。相手の自由を尊重して無用な干渉をせず、ときには同じ問題について対等に議論しあうムーミン一家は「さっぱりとした自立した関係」を築いているのです。

「ものを所有しないことで自由を得る」ということも、重要なテーマのひとつです。スナフキンは精神の自由を得るために、ものを所有することを極力避けています。逆に、多くのものを持ちすぎ

ていたフィリフオンカは、竜巻で家財道具一切を失って、初めて心の自由を知ることになります。

他の登場人物たちの個性も、エピソードをまじえながら紹介されていきます。少年というより少女に近い感性をもったムーミントロール。理想的な父親を演じようとして失敗してばかりいるアンチ・ヒーロー、ムーミンパパ。やさしさとユーモアを兼ね備え、皆に信頼されるムーミンママ。辛辣なミイは、時にムーミントロールの本心を言い当てる「Alter ego」の役割を演じているのです。

『ムーミンパパの「手帖」』は、ムーミンを読んだ経験のある方にお勧めしたい本です。きっと、ムーミン物語の新たな魅力を発見されることでしょう。

この本を通じて、ムーミン物語以外の作品にふれることができたのも、私にとっては大きな収穫

でした。ムーミン以外の作品は、現在六冊ほど邦訳されていますが、今回はその中から『彫刻家の娘』（講談社、一九九一）と『誠実な詐欺師』（筑摩書房、一九九五）の二冊を御紹介します。

『彫刻家の娘』は、作者の少女時代をモデルにした自伝的な作品です。彫刻家の父と挿絵画家の母をもち、安らぎと刺激に満ちた幸福な幼年時代をすごしたヤンソンは、早くから鋭い感性を育んでいました。

「石」という章では、この本のなかで最も印象的なエピソードが語られています。大きな純銀の石を見つけた少女は、家まで転がして持ち帰ろうとします。通りですれ違う人々が何と言っても、一心に石を転がしつつけながら、少女は思います。「ほんとうに大切なものがあれば、ほかのものをすべてを無視していい。そうすればうまくいく。自分の世界に入りこみ、目をとじて、おおげさな言

葉を休まずつぶやきつづける。そのうち確信がもてるようになる。」自分の世界に入り込み、大切なものを守り続けるこの精神が、ヤンソンを芸術家たらしめているのでしょう。

この本は、トーベ・ヤンソンという一人の少女の物語として読んでも面白いのですが、「子ども時代」に共通するエッセンスを描いた本でもあります。空想が大きな意味を持ち、死を意外に身近に感じていた時代。友人に嫉妬をおぼえ、殺される生きものに深く同情する。そんな子どもの心の動きが、簡潔な文体で描かれています。

二冊目の『誠実な詐欺師』は二人の女性の確執を描いた長編です。これは大人向けの小説で、最近、筑摩書房から『トーベ・ヤンソン・コレクション』というシリーズで邦訳さ

れた中の一冊です。

舞台となるのは、雪に埋もれた海辺の小さな村。この村に住む風変わりな娘、カトリは、ポートにしか興味のない弟にポートを与えるために一計を案じ、裕福な女流画家アンナに近付いていきます。アンナの家に住みこんで事務一切を引き受け、アンナの収入を倍増させて、その報酬としてお金を得るのが目的です。

カトリの計略は着々と進行していきますが、ア



シナとの関係は「悪人が善人をだまして利益を得る」ような単純なものではありません。まったく異なった個性をもった二人は厳しく対決し、お互いに苛立ち、傷を負いながらも、それぞれに寛容を迫られることとなります。

訳者の富原氏は、カトリ、アンナ、そしてカトリの弟マッツは「たったひとつのことしか眼に入らず、たったひとつのことしか理解できず、たったひとつのことしか興味がない」点で、奇妙に通じ合う」と言っています。マッツにとって「は自分で設計したポートを作ること。カトリは弟にポートを与えること、アンナは森の奥ふかい神秘を写し取って絵にすることが人生の目的なのです。」

この三人の姿は、一心に石を転がしていたあの少女の姿に重なっていきます。自分の大切なものを譲らず、守り続けようとする三人は、富原氏も

指摘しているように「独自のスタイルをもつ芸術家」だといえるでしょう。そう考えて、再びムーミン物語を手にとると、ムーミンの中にも芸術家Vのモチーフが現れているのに気がつきます。ヤンソンは一貫したモチーフをもっていて、いろいろな作品の中に反映させているようです。

ムーミン物語と他の作品をいったり来たりすることで、ムーミンに描かれた様々なテーマがよりはっきりと浮かび上がってきます。ムーミンだけを読むのも楽しいけれど、こんな読み方もまた面白い。今後もヤンソンの新たな作品を読みながら、ムーミン物語を読み返してみたいと思います。

(会津大学)